大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十四年十月三十一日印刷納本　大正十四年十一月一日發行

婦人運動

十四年

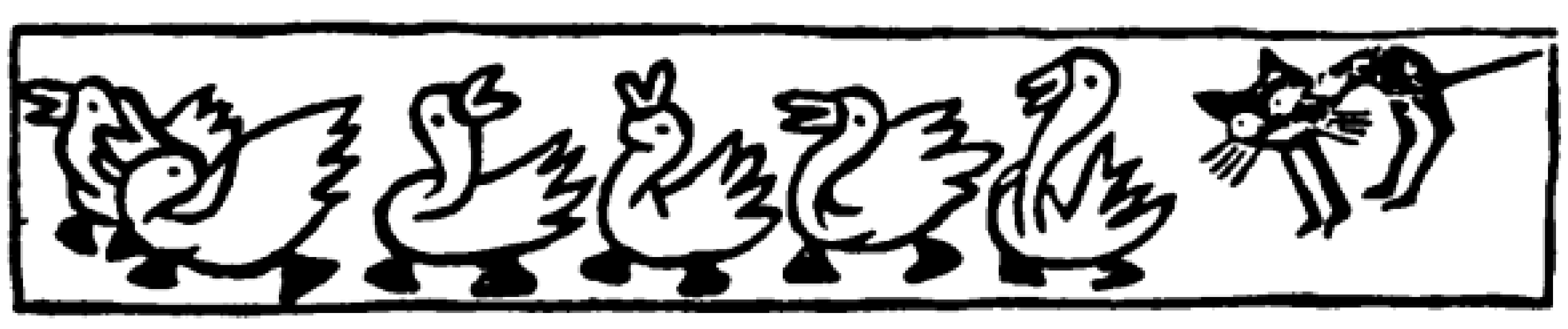
職業婦人社發行

十一月號

第三巻 第八號

婦人運動

大正十四年十十一月合併號



轉居

東京府下蒲田二四七番地

職業婦人社



明鏡の影

最近の失業調査に依れば、日本は世界第一の失業國である事が發見された。數ケ月前英國の勞働組合聯合會長は、「失業問題解决のため、この冬までに何とかしなければ、國民は暴動化するだらう」と云つた。「勞働か餓死か」それは英國に於ける最近の流行語である。我日本は此場合に於ても、その得意の國際的特種説を主張し得るであらうか。刻々に増加しつゝある失業者の數に不景氣の齎す諸相は何を語りつゝあるであらう。爲政者の手腕を信ずるか 資本家の温情を信ずるか、失業者の禮讓を信ずるか。天佑の奇蹟を信ずるか

その經濟生活の凡てを男性に委ねて、果してなき長夜の夢を貪りつゝある婦人よ。

臙脂よ、脂粉よ、ヘリオトロープよ、密にほゝ笑む明鏡の片隅に浮んた汝等の背後より迫りつゝある餓ゑたる虎狼の群は、單なる錯覺にすぎないであらうか。

時評

婦人運動所感

下中彌三郎

□市電婦人従業員の待遇問題

市電自治會といふ大きな有力な團體がありながら、市電當局が「同質同量の勞働に對する同一賃金」てふ原則を無視して、婦人従業員諸君が、男子のとは可なり開きのある安賃金で雇はれることを平氣で看過してゐるのは遺憾だ。勞働組合がかゝる場合に正式に堂々と抗議することを忘れて、一方に失業防止の運動を起したとて、十分に効を奏しないだらう。まづ、自らの直接の問題を正視しなくてはならぬ。安賃金に甘んずる婦人従業員の侵入を侵入のまゝに放置するなら、やがてそれだけ男子従業員の失業者を多くすることは明かだ。

敢て、婦人の勞働に反對し、婦人の職業を阻止せよといふのではない。同質同量同賃錢の原則によつて勞働運動の正しき意義、相互扶助の眞精神を明かにせよといふのだ。

妻子を養ふべき男子と、でない婦人との賃錢には當然相違のあるべきだとの不透明な理論にまどはされてはならぬ。男子の賃金には妻子の扶養するに足るべき賃金を含むといふか、然らば、妻子なきものを如何にする、家族の多きと少なきとを如何にする、これ等の考へをおしつめて行くことによつて賃金制度の社會的意義が次第に明白になるのだ。

今日のところ、事實、婦人と男子は、同質同量の勞働はなし得ぬかも知れぬ。しかし、その賃錢の差は決して勞働の實質の差に恰當するものでないことも明かである。男子市電従業員諸君は何故この點について考一考せぬのか、更に女子従業員諸君

は何故に、勞働實質相應の賃金を要求せぬのか。

婦人運動は、今後、これ等の實際問題を研究することによつてその意義を明かにして行かなくてはならぬ。

□職業婦人團結の要

某新興生命保險會社は盛んに職業婦人を募集し、生活苦に沈淪する婦人に生活の道を與へつゝあるのは決してわるいことではない。けれども、その使用方針については考ふべきものがありはせぬか。所謂「外交」と稱する勸誘員に當らせる場合において、契約高においてその成績を見るに偏するは營業上止むを得ざることであるとしても、その成績競爭のあまりに猛烈をきはめるため、婦人らしきつゝましやかさを失ふはいふまでもなく時に、婦人であることの弱さとづぶとさと媚態とをすら、むやみに行使さするに至つては、生活苦のやむなき仕儀とは申しながら、それによつて導かるゝ社會倫理の墮落的傾向は寒心に堪へざるものがありはせぬか。

資本主義に道德的態度を要請することの愚はさることながら健全なる社會は、こゝに健全なる婦人運動の常識は、これ等の事象に對してもつと明白な態度をもつて臨むべきではないか。「自らさへよければよい」とする利己的態度から、職業婦人を救はんがためには、何はさておき健質なる職業婦人の團結が必要であると思ふ。

□日本婦人としてのプライドを高めよ

何ごとも歐州崇拜の日本人には、外國人としいへばキリスト敎徒、キリスト敎徒といへば正義人道の人、さういふ風に早合點し、信頼し、心をゆるし、畏敬する傾向がある。しかし、外國人に對するかゝる觀察の謂はれなき事實は、今度の伊國色商某と虛榮日本娘某との關係によつていみじくも明白に露骨に見せつけられた。

歐州人が概して肉慾的野獸性

に強きことは、海外生活者、ことに海上生活者の常に目睹し、實驗するところによつて明かなのであつたが、多くの文明病患者にはそれが明かに見えなかつたのだ。今回の出來事及びそれに連關する日本の特殊階級婦人の腐落せる事實の白晝的展開によつて、日本民衆も何程かその眞相を知り得たであらうと思ふ日本婦人は日本婦人としてのプライドをもつと高めて然るべきだ。

□生活苦、文明病患者

生活苦は恐しい。近頃頻發する自殺、生き別れ、魔窟狩によつて發かるゝ密淫賣の事實、皆これ現代生活苦の苦悶を實証するものならざるはない。虚榮の果と冷やかに評するのは酷だ。虚榮のためも勿論あらう が、文明病患者が虚榮を滿たし得ぬ苦も明かに一種の生活苦ではないか。虚榮を呪ふものは文明病患者養成を目的とする現代のブルジョア教育を呪はなくてはならぬ。

□實地踏査を行へ

朝鮮災害婦人慰問會の企圖はよいことにちがひない。けれども、事實を明かに調査することを前件としなくてはならぬこといふまでもない。東京には聯合婦人會の多士濟々たる團體がある。一日も早く、多少でも慰問品を携へて先づ實地を踏査し、それの調査を根據として出發すべきではあるまいか。實際は新聞紙などの報ずる以上に悲慘な狀態にあると言はれる。果して然らば、この際大々的にこれが救助に力を致すべく、內地の全婦人、否全內地人あげて立つべきではなからうか。

□婦人運動に望む

婦人運動は、すべてにおいて今少しく健實に、今少しく實際的に、今少しく積極的に、今少しく身を入れてやらなくてはならぬ。

つまらぬことにこせりあひを

し、その間に日がくれて、秋が來、冬が來てしまふ。男子の運動もやはりこぜりあひが多いのだから、婦人運動をのみ勿論かれこれいふべきではないが、男子の爭ひはともかくもいくらか主義主張の爭の形があるに反し婦人運動は主として名の爭ひ、利の爭ひ、形のあらそひ、行きがゝりのあらそひ、感情の爭ひであるやうに思はれるのは遺憾の極みだ。

婦人賣買

岡田俊三

最近ゼネバに開催された國際聯盟では婦人の人身賣買を二十一歲以上に制限して、それ以前には賣買を禁止した。人間の頭一つ擲つても、死んだ人間の死骸を堀り起しても、立派に犯罪が成立する世の中で、人間が生きた人間を賣買ひするのに年齡も制限もへつたくれもあつたものでない。がそれでも無制限に賣買されることから見たら未だいゝとしなければならないのに日本政府は念入に日本婦人は他國人に比して早熟だと云ふ理由のもとに、滿十八歲を限度とする除外例を求めた。

云ふまでもない事であるが日本の男子は二十五才以上でなければ選擧權がなく、被選擧權は三拾才にならなければない。況んや女子の選擧權の如きは尙早尙早で問題にならない。然も日本の女子は自分が賣られて行く塲合には拾八才で一人前の人間としての思慮を備へゐるものとして取扱はれて行くのである。

盜人にも三分の理屈がある。流石に賢母良妻の國、夫唱婦隨の國と云はなければならない。



女の賃銀はなぜ廉いか

野坂龍子

一、同一勞働には同一の賃金

どこの國でも、何の仕事でも女は男の半分位の賃銀しか貰はぬのが當然のことゝなつてゐます。何しろ同じ仕事をするのには一方には二圓、一方には一圓しか遣らないで濟むといふですからこんなウマいことはありません。大して仕事の出來ばえに違ひがなければ、資本家は男の代りに女を使ふにきまつてゐます。かうして女はどし／＼男の仕事の領分にくひ込んで行きましたが、さうなつて來ると男は女と競爭するために、自然以前より廉く働かねばなりません。そこで男の賃銀が下ると、それにつれて、どんな場合にも男の半分程で働らくことにきめらてゐる女の賃銀も、前と同じだけの割合で男より廉くなる。

近頃のやうに不景氣だと到る所に此男と女との仕事の奪ひ合ひ、賃銀の引下げ合が行はれます。ツイ先頃も或會社で月給六十圓の男事務員を首にして女事務員を五十圓で傭ひ入れたが、又半年ほどすると四十五圓で働らくといふ男事務員のため

に此女も失業した。が、今では會社は三十五圓で働らくといふ女事務員を探し出したので、又其男事務員も首になつたといふのです。こんな例はザラにありますが、此場合、資本家と男事務員と女事務員との三つ巴の中で、一體誰が得をして誰が損をしてゐるのでせう。云はずと知れた資本家だけが得をしたので、賃銀引下げのいたちごつこをした男も女も、同じ無產階級の人々であるからには、結局無產階級全體が損をした譯なのです。

それで何處でも外國の勞働組合では、同一勞働に對する同一賃金といふことをやかましく云つて同じ仕事に對して女が廉く使はれることに反對しそれによつて、男といはず女といはず、無產階級全體が資本家の餌食にならぬように氣をつけてゐるのです。

二、資本家の理屈

さて女が男の賃銀の半分しか貰はぬことについて勞働組合が反對しますと、資本家はいつも次のように答へます。

(一) 女は自分で食つて行くには及ばない。親兄弟や夫に食はせて貰ひながら、ホンの小遣ひ取りに働くのだから、安くてよい。

(二) 女は萬事につけ約しくて金が要らず、食物も少くて濟むし、酒や煙草も用ゐず、男よりも安上りな暮しが出來るから、同じだけ働いても男の半分の賃銀でよい筈だ。

(三) 女は萬事につけて男だけの働きがない。例へば男なれば、きまつた仕事の外に臨時に力わざもさせられるし、讀み書きも達者だから融通がきくが、女の方はきまりきつた仕事の外には頭が働かないので、自然賃銀も、男より廉いのが當り前だ。

此本をお讀みの皆さんは只に資本家許りでなく勞働者の中にもこんな出鱈目を眞に受けて、女は男より廉く働くのが當り前で、又働かずともきつ

と他に養つて呉れ手がある筈だといふやうなことを考へてゐる人のあることを御存知でせう。そしてさういふ人はきつと、妻子を養ふために働く男の仕事を、女が廉く働らいて横取りするのは怪しからんと云ふでせう。勞働者の無智とはさういふことを云ふのです。

さて(一)の言草ですが、皆さんはブルジョアのお孃さんが慰みに琴でもいぢるやうな氣で、ホンの氣晴らしの小遣ひ取りに工場へ通つてお出でゞすか。資本家は、皆さんが一日働いて奴等の葉卷一本買ふにも足らぬ賃銀を貰ひ、それで米を買ひ電車賃を拂ひ、病氣の親の藥代を拂ひ、弟や妹の學用品を買はねばならぬといふやうなことは、餘り考へたくないでせう。ですからそんなことは知らぬ顔の半兵衛で、奴等の娘がピヤノやダンスの稽古に通ふと同じやうな道樂の暇潰しに、皆さんも工場へ通ふのだと勝手にきめて、世間をごまかし自分の良心をごまかし、そして皆さんの賃銀をごまかしてゐるのです。

外國でも資本家はいつも斯ういふことを云ふものですから勞働婦人が實際について調べたことがあります。それはツイ十年程前に、英國でフエビアン協會の婦人會員が英國中の勞働婦人について調べたのですが、それで見ると百人の中五十二人までは、自分が食つて行く外に平均二人の家族を養はねばならぬ人であり、あとの三十三人は家族を養はないまでも、自分だけは働いて食はねばならぬ人達でした。そして殘る十五人だけが、マサカと云へば親兄弟の世話になれる見込のある人達であつたといひます。そしてこれを男子の勞働者の有樣と比べても餘り違ふことはなく、男の中にも家族を食はすには及ばぬ獨り者も中々多く、マサカといへば親兄弟に食はせて貰へる者も、女の方のさうした人達の割合とほゞ同じであつたさうです。

英國以外の國でも同じことですし、殊に女工さ

んが國許へ送る賃銀の中から、親が税金を收めたり、農具を買つたり、地主へ借金の利子を拂つたりする日本では、一人一人の場合は別として、全體として見た婦人勞働者は、小遣ひ取りどころか、自分が食つた上に家族まで養つて行く、立派な一人前の勞働者なのです。それが一人前働いて、半人前の賃銀しか貰へぬことは正しいことゝ云へるでせうか。

それに男でも、賃銀は家族の有る無しできまるものでなく、家族は有つても無くても、仕事の出來榮できまるのですから、女の場合だけ、家族の有る無しをとやかく云ふのも妙な話です。

三、婦人は廉く暮せるか

(二)のように、女は男よりも暮しに金が掛らぬといふのも餘り馬鹿にした話です。

女が工場に通ふ時、其電車賃が男の半分で濟むでせうか。

女の着物は男のより廉く買へるでせうか。

家主さんは、女には家賃を半分負て呉れるでせうか。米でも、味噌でも、醬油でも、葱でも大根でも、新聞でも雜誌でも、芝居でも活動でも、湯錢でも郵便代でも、女だからといつて半分割引きして貰ふことが出來るでせうか。

それに普通には、女の方が男よりも餘計身のまはりに金がかゝることになつてゐます。

して見ると女は男の半分で暮せる證據は何處にもないのです。たゞ一人前働いても半人前しか資本家が拂つてくれないから、餘儀なく無理やりに切りつめた暮しをし、まづい物を食つて我慢してゐるだけなのです。ですから身體は弱り、頭は進まず、結局食へない苦しまぎれに恥かしい身賣りまでする者が出來て來るのです。娼妓とか淫賣とか云ふ者を調べて見ると、四割から六割ぐらゐまでは、女工をしてゐた者だそうです。これが女を

法外に廉く使ふことゝ關係がないとは誰が云へませう？」

四、婦人は劣等種族扱ひ

（三）のように、女は男のように融通が利かない定つた仕事しかさせられぬから、平生男並に働いても半分しか賃銀を拂へぬといふのも勝手な理屈です。それなら男についても一人一人、隨分融通の利く人も利かぬ人もあるからそれによつて賃銀を違へねばならぬ筈ですし、又仕事によつては男より女の方が融通のきくこともあります。それに本來、きまつた仕事より外の仕事までさせようといふ、資本家の慾ばつた註文が間違つてゐるのですから、外の點で男と女がどう違はうとも、同じ仕事をさせる以上は、同じだけの賃銀を拂ふのが當り前なのです。

中には又、女を使ふときには、工場法などの面倒な規則のために工場の設備や監督に金がかゝるから、賃銀を男なみにしては引き合はぬといふ者もありますが、女に其價値相當の賃銀を拂つてひき合ぬ位なら、無理に女を使はなくとも男を使へばよいのです。それだのに、女を多く使ひたがるのは、少々餘計な金がかゝつても、賃銀の安い女を使ふ方がとくだからでつまりこれも資本家の得手勝手な云ひわけに過ぎないのです。かう考へて來ると、どの點から見ても、同じ仕事をさせながら、女には男の半分そこ〳〵の賃銀しか支拂はぬ資本家の云ひ分が間違つてゐることがハツキリ分ります。全く女の賃銀が廉いのは、そういふ譯から起つたことではなくて、今日の世の中全體が女は男よりも劣つた、價値の少いものといふ考への上に立つて居り、それを動かすことの出來ない神樣のお告のやうに心得てゐるのと、法律や習慣が全てそういふ考への上に出來上つてゐるからに過ぎないのです。それは支那人や朝鮮人の場合とて

も同じことで、人間として内地人と同じ價値に認められないから、廉くコキ使はれるのです。そしてさういふ習慣は、勞働者を資本家の奴隷にしておく仕組全體と關係して居り、その仕組を支へて行く大切な柱なのです。ですから皆さんは、一方では「同一勞働に對する同一賃銀」の要求を掲げて資本家と戰はねばならないと同時に、一方では女を男の奴隷と看做してゐる法律や習慣と戰つて行かなければならないのです。

これは決して女許りの問題でなく、無產階級全體の問題であります、殊に日本のように女子勞働者が男子勞働者より多い國では、女が男より廉く働くために無產階級全體がどれほど苦しんでゐるか分らないのです。前にも云つた通り、男と女とではウンと賃銀が違ふ上に、たいていの仕事は、練習次第で女にも出來るので、資本家は出來るだけ賃銀の高い男を首にして廉い女を使はうとします。そこで男と女とは仕事の取り合をはじめ、男と女との競爭上、廉い賃銀で我慢するより仕方なく、結局、男も女も勞働者は貧乏になるばかりです。

近頃、大阪府で調べたのをみると、男女の賃銀のちがひがだん／＼少くなつてゐますが、これは女の賃金が上つたからではなく、男の賃銀が下つたからださうです。これでは、男と女と賃銀が同じになつても何にもなりません。

私達は女のためばかりでなく勞働階級全體のためにも婦人勞働者の賃銀を上げることによつて、男女の賃銀を平等にする爲に戰はなければなりません。

本誌は去る九月号より「婦人と勞働」と云ふ名前を、現在の「婦人運動」と改題しました。

□

月をして
此の詠嘆を照らしめよ
漂々として
人去らんとす

□

眞晝どきつかまへられた蛙かな

これは、逸枝さんが家出をして那智の瀧に近い天滿の木賃宿から新宮の特察署に連れられて來たときの詩である。一夜、逸枝さんと私とは、女の生活と結婚、家庭といふ風な問題に就いて語り明かした。今の家庭生活といふ様式は、女を生かして呉れませんね、制度が惡いんですよ、ね、などゝ。次に掲げるのは、その後さすらひの旅の途上から寄せられたものである。私たちは、逸枝さんのこの悩みを通して、世の多くの家庭婦人の悩みを、耳近くはつきりと聞く思ひがする。（M生）

女と家庭

――私の家出に就て――

高群逸枝

東京朝日新聞の捏造記事が私といふ一個人、のみならず所謂新らしき時代の女、文筆に携はる女等が、いかに唾棄すべく輕薄なものであるかといふことを示すことによつて、抹殺しようとした今度の事に關しては、もし私が此のまゝ再び家に歸ることなく、眞の孤獨、私自身として立つことが許されたのなら勿論沈默、また無視しても私自身にとつて何ほどの打撃でもないのであるが、今やまた家に歸らうとしてゐる、夫婦の愛の辛らさ故に歸らうとしてゐる私にとつては、國の兩親、そ

の他私に愛をもつすべての人々、また廣くわが國の女達のためにこのまゝ沈默すべきではないと考へ、宿のすり切れた筆を借りて、慌だしく事の眞相の一部を批攊して、社會の誤解を解きたく思ふ。

もしそれ新聞紙の使命が、朝日の如くに「三面記事」を作つて俗世間に媚び、かよはき女、及び女達のすべてを無視することにあるとするものなら、また他の使命の一が、さうした卑俗な誤解から世間を救ひ、世間をして一層高所に着眼せしめるやうにするのにあることも勿論であらう。

私の家出は女と家庭、時代と結婚、夫婦の愛と尊敬、さうした複雜な事情、そして多年の煩悶に原因してゐる。

私は自らを責めて、わがままであるとした。けれどもそれは枉げるに枉げられぬ「自我」の本能及び自由の現はれである。ここに悲しいことは、夫との間に、愛情の点に、何一つ缺陷もなく、結婚以來一層こまかに、一層離れがたいものになつてゐることである。けれども、この愛情と家庭の組織、雰圍氣、さうしたものとは違ふ。

私共は日一日と、現在における結婚生活、その組織には耐へしのびがたくなりつゝある。

故にさうした本能及び感覺の鋭敏な者にとつては、家出をするより外に道はない。

家出をしても、現在の虐げられてゐる私共に、何の食ふ道、保護されてある道があらう。

乞食になるよりほかにいたし方はない。

私はさう腹をきめて、實行した　たゞ他の人とそこらまで道づれになるといふ書置を殘したのが世間的には落度であつたらう。それを捕へて、世間は一も二もなく卑猥な推測をする。

女達よ。私共は何をしても恁うである。誤解は充滿してをり、空氣は汚濁してゐる。

けれども何を私共は恐れよう、私は恐れぬ。私はあなた方と一層結束して、この濛々たるもの、霧、障害、壓迫を突破する。

私が家出したことによつて、夫は辛らい愛一つになつて私を追ひ、私もまた旅出の途で泣きつゞけた。

何ものにもまして愛は悲しく、世間とその空氣は忌はしい。私は夫を愛し、尊敬してゐる故に、夫の妻である上は、貞淑で、善良で、家庭的であらねばならぬやむにやまれぬ本能を自らのうちにもつてゐる。けれどもその本能と私自身の「自我」の動きとは違ふ、ここに煩悶がある、懊惱がある。

あゝ何たる神々の惡戯だらう。私の叡知、私の自由がむしろとり去られてあるならば―。

けれどもこの切なる兩人の愛が、今度のことで一層離れがたいものであることを知つた以上、私と夫とは、なほこの先き、悲しい生活をつゞけて行くよりしかたはあるまい。

私はよろこんで夫に抱かれ、夫の妻として一生を終る覺悟をした、夫はまた私の自由を無限に認め、保護し、私と一体であらうとするといふ。

これは何といふ夫に對して申しわけのないことだらう、私の自由のために夫を引くといふことは。

その苦しさ、夫を愛し尊敬する故にのみの苦しさを以て、私は一人にならうと決心したのであつたが、今はもうあきらめる。

何卒夫が私を許してくれるやうに、かくまで「自我」の強い、はげしい衝動をもつ私、故に、何卒夫が不幸でないやうに神にいのる。

「尻に敷く」といふあの言葉は私をせんりつせしめる。私がどうしてそんな女だらう、また目ざめてゐる時代の女達よ、あなた達のすべては、目ざめてゐられゝばゐられるほど夫に對しては敬虔な心持をもつてゐられる。けれどもやみがたい「自我」の現はれが、古い見方から見る時には、ひどく我がまゝな、夫を「尻に敷く」女にも見ゐる。

ここに私の煩悶はあつたのであるから、むしろ別れようとしたのである。

萬事悲しく、辛らい、けれども私はまた歸つて

行く。どうせ私共は過渡期に生れてゐる、重荷を負ふたまゝ、行けるところまで行かう。

みなさまが、一層私を知られ、私を愛され、私と共に結束、猛進されたきことを筆に大にしてここに祈る。

私は一層あなた方が戀しく、なつかしい、さぞかしあなた方もあなた方自身のうちに、多くの煩悶をもたれてゐなさることだらう。

どうか私にも告げ知らせて下さい、御いつしよに手を取り合つて行きませう。

九月二十九日湯川温泉にて

AとBとの對話

A　智的な生活を持つた女にはどうも今の家庭と云ふ奴が苦しくなるやうだね。

B　さうかなあ、一層うまく行きさうなものだがなあ、例へば雑巾がけをする事だつて、飯を上手に焚く事だつて立派な仕事だと思ふがなあ。

A　ざうりやそうさ、だけど例へば我々にしたつて、肥くみや、溝浚ひは立派な職業だと思つてゐるが、さて自分がやるとなると一寸閉口するからなあ。女だつて個性がある以上、人によつて、いろんな事がやりたいさ。實際女の立場から云へば、亭主に厭な顔を見せないで、眞正直に家庭の仕事をやつてゐた日にや、自分の頭の生活なんてありやしないからなあ。

B　そんな女は家庭なぞ持たなけやいゝんだ、僕なんかは、さうなると、家庭の事で一ぱいになつてゐる所謂古い女がいゝね。

A　そりやお互だ、第一便利だ、だけども女が何時迄もそれでゐてくれるかと云ふ事が問題だね、さうなると女を所謂古い鑄型に叩き込むか、でなきあ家庭の内容を改めて行くかと云ふ事になるんだね。

B　つまり家庭の勞働騒議だね。(苦笑)

A　まあそんなものだ

B　お互に資本家と云ふわけか

A　隨分貧相な資本家だね……

B　ふふ……

A　はは……

政治研究會臨時大會を顧みて

佐野袈裟夫

去る十月七日、芝協調會館に於て政治研究會第三回臨時大會が開催された。この大會は無産政黨組織準備委員會に對する政治研究會としての綱領及び規約を決定する爲に主として開かれたのであつた

新聞紙上に於て分裂するものの如く書き立てられたりしてゐる爲めに外部からも大に注意の目をもつて見られ、また内部に於ても組織大綱の本部案に對する修正案が提出され、其處に可なりな紛糾がかもし出されるであらうといふ豫想から代議員の間に緊張味を示してゐた。

これより前、本部の綱領及び規約の草案が出來上る迄にも意義ある試練を經なければならなかつた。綱領はこれ迄に高橋龜吉氏の私案が出來てゐたのであるがこれに對して不滿を懐いてゐるものは尠くなかつた。無産政黨組織準備委員會に提出する綱領を作成する必要に迫られるにつれ、その形勢はます〳〵はつきりと現はれて來た。確かに高橋氏の綱領は自由主義的改良主義的であつて、階級的な闘爭精神を全く缺如してゐた。これを基本にして政治研究會本部案が作成されることになれば、一大事とあつて、東京評議會は猛然として反對の氣勢をあげた。本部の中央委員及び調査部委員もまた多數をもつて高橋氏の案に反對し、新たに綱領作成することになり、更に九月四日の全國の評議會及び主要支部代表と中央委員會代表とからなる綱領規約特別委員會の審議を經て、大會へ提出される草案が出來上つてゐた譯である。

當日は大山郁夫君の開會の辭に始じまり、議長は代議員の中から推薦された、ことも新味を示したものと言はなくてはならない。友誼團体の祝辭にも活氣があつた。議事振りもだん〳〵訓練が經て上手になつて行くのが見られた豫想された紛糾もなくどし〳〵議事が進められた。

本部提出の綱領案は、ほんの僅かな修正と一二項加へられただけで可決された。こゝに政治研究會の無産政黨の綱領が出來上つた。この綱領は歷史的な意義をもつべきもので、十分誇りとするに足るべきものであると思ふ。イギリスの勞働黨、ドイツの社會民主黨、ロシアの共產黨などの綱領とも並び、全く日本の政治的經濟的社會的の諸事情の現實に應對して、無產階級の政治的鬪爭題目を掲げたもので、日本獨特の綱領といはなくてはならない。それは無產階級の解放の高い或は遠い目標をかゝげた原則綱領或は最高綱領でもなく、また無產者の爲めにいくらかの利益をもたらし、生活の向上の

爲めにするところあらんとする約束綱領或は最低綱領でもなく、現實の行動をもつて獲得し、ます〳〵階級鬪爭への道へと發展し行くべき大衆の當面の要求題目を掲げたところの行動綱領なのである。

この綱領は幾多の過程を經、難關を突破して出來上つただけに、可なり立派な完成されたものとなつた。其處には無産階級の動的な力と鬪爭的な精神が十分に表現されてゐる。しかも現實的であるところに特色がある。そして無産婦人の要求も十分考慮されて取り入れられた綱領として、また無産婦人の支持をも十分に得ることが出來ると思ふ。

組織の大綱の審議に於ては、原案を支持するものと、修正案を主張するものとの間に可なりはげしい論戰が行はれた。原案の勞働組合を副次單位として黨の中に織り込み、以て階級的な指導精神を其處に發揮せしめると共に、黨の決議に參加することによつて組合に黨の拘束力を及ぼし以て協同戰線の實をあげしめるやうにしようとするのに對して、修正案は組合を全然黨の外に於て黨をして自主的活動と發達とを遂げしめようといふのである。修正案の支持は現實の事情を見ずして徒らに空想にかられて、はじめより獨立した黨の發達を望む理想的な黨を描いてゐるのであるが、その誤謬なることは幾多の原案支持者の論駁にあつて暴露され、遂に壓倒的多數をもつて原案が可決されることになつた。

最後に中央委員の改選が行はれたが、大會前に既に辭任した中央委員も二三あり、また分裂等のことを新聞に吹聽した二三の中央委員は到底再選され得ないことは初めから明らかであつた。それで新しい中央委員は大分顏振れが變りました。しかし新中央委員は京都、大阪、神戸から各一人、水平社から一人、東京市電自治會から一人といふやうに新しい方面から選ばれることになつて、一層活氣あり意義ある執行機關として出來上つたことは政研の爲めによろこばなければならない。

かくして大會は分裂などを見ることは勿論なく、紛糾もなく順調に終つた。政研の内部は一層强固なものとなつたことは明らかである。そして小ブルジョア的な自由主義や改良主義に陷るべき危險を飛び越えて、無産階級としての正しい立場をはつきりさせ、進むべき方針を確立し統一して行くことになつた。大會を經ることに堅實さをいよ〳〵加へることになつた。最早押しも押されもしない政研である。分裂などゝいふことは斷じてない。會員もます〳〵増加して行く。無産政黨が成立しても、政研の使命はます〳〵重きを加へるばかりである。黨の中に於ても、また一般無産大衆に對しても一定の方針をもつた政治教育はます〳〵必要になつて來ることは明らかである。大會での宣言の中にも、「階級的政治教育の普及に努力せよ！」とあるのは、政研の今後の使命を語るものである。

遠人思慕

青木音吉

白波あがる、
ゆふぐれのツワイライトに、
渚ゆき君おもふわれのこころに、
暮れてゆく沖の小島に、
あなあはれ清く寂しく、
とうとうと白波あがる……。

社告

本誌は創立以來專ら諸種職業に携はる婦人のみの手で經營支持されたものであります。云ふまでもなく寄稿其他の諸点に關しては、社外のあらゆる方の援助を受けて居りますが。社員或は同人と稱する者には一人の男子も雜へない事を、廣く讀者諸賢に御傳へします。

職業婦人社



都をおふた流行

梅山一郎

享樂と自由
に憬れるモダンガールの解剖

モダンガールの集る世界

「何に婦人がどんなに黄色い聲を張り上げても、參政權はさう〱安直には渡さないよ。まアさんざん苦しむさ、婦人の天職は乳房を哺ませることゝ、內助の功だけだよ」と言つて、天下の泰平を夢みてゐる男子があるとしたらば、彼は毎日の新聞紙を大きい目をあいて見直さなければならぬと言ひ度い。成る程婦人運動者の口癖のやうに叫ぶ參政權の獲得や、帝國大學の男女同學までは來てゐない。然し、彼の女等が長年求めた自由は、世間見ずの男子の想像だに及ばぬ程、開けて來た。自由の身になつた擧句は、そればかりでなく、男がやる歡樂は女も、試みて見ると云ふところまで漕ぎつけた。而して心に自由と享樂を宿し、孔雀の如く人工の美を施して、社會を濶歩してゐる。私はこれをモダンガールと云ひ度い。あなたは都をおふが如く殖ゑて來るこの享樂と自由の權化のモダンガールを見た事はないか。茲で一緒に彼の女等の集る世界を少し覗いて見やうではないか。

モダンガールの生ひ立ち

私が眼をつぶつて、自分が知れる範圍の過去をふりかへつて、モダンガールの生ひ立つて來た姿を思ひ浮べた。少數の先覺者の自由解放の宣言や

「ノラ」や「マグダ」の芝居を見て、封建の家族制度の窮屈さを知つた昔はさて置き、白蓮、有島等のラブアフエヤーが與へた戀愛の世間的洗禮を序幕に、三角戀愛の芝居を地て舞る者の殖えたことを思ふ。また世界大戰の好況時代に都會のオッフイッスやストアーが、俄かに婦人を着飾らして、店の看板に使ひはじめ、ここに所謂ショップガール、スリートガールの卵を生んだことを思ふ。これに前後して婦人の奴隷的位置を解放せよと、社會に叫び出した所謂口も足も手も八丁の洋裝の婦人運動者の誕生を思ふ。何と云ふ素晴らしい婦人たちの發展であつたらう。彼の女等は性の自由と、經濟の獨立と、政治的社會的の向上を求めつゝ何を得た。どんな因習の垣根を打ち破つたか？人の前で大聲あげて演説することを覺えた。男と交はることを覺えた。戀愛の味を知つた。男に反抗し親に楯つくことを學んだ。自分の好きな衣物を買ひ髮を結ぶことを覺えた。煙草をのむことを知つた。男の世話にならずに生きてゆける力を身につけた世界の流行を取り入れることを知つた。極めて個性的になり時によると利己的な人間に變つて來た音樂に活動寫眞に運動に何か刺戟がなければ生きて行けなくなつた。どんな十人並み以下の女でも人並みに見られるだけに美しく粧ふ術を覺えた。何か人と變つた斷髮表現派の裾模樣と云つたものをつけて衆の中に目立ち度いとあせつた。結婚しても家に落着いてゐられぬ習慣がついた。離婚など割合に簡單に片づける度胸が養はれた。髮にも服裝にも年齡や階級のけじめが尠なくなつた。男と平氣で歩きカアフエーでビールを飲むことが出來るやうになつた。ダンスの味をも味うた。…………此等は何時とはなしにモダーンガールが、作りあげた世界である。何と云ふ素晴らしい發達だ。然しながら私は更に深くモダンガールの代表的モデルとも云ふ可きグループに入つて、彼の女等の生活を解剖する任務がある、

■……自由と力をふりまいた女

私はなる可く女の集まる世界を求めて、その内狀をさぐつて見た。口に婦人の自由を唱へる彼等婦人運動者の此の頃の内幕位、モダンガールの資格に適中する者は少なからう。彼の女等は演壇で男女の同等を叫び、多くの婦人の自覺を促してゐるから、一層皮肉だ。先日いたずらものゝある新聞記者が、某參政團体の同人の一人が、表では立派に振舞ひながら、有名な代議士の圍ひ者になつてゐるのを聞きつけて、「自分は社會の廓清の爲に之を世の中に發表するがあなたは何うする」と詰問した。言はれたことが僞でないので、其の婦人は眞蒼になり、先輩の婦人に依賴して新聞の記事に出すことだけは勘辨が願ひ度いと泣きついた。記者も脅迫が目的でなく、婦人運動者の廓清の爲に言ひ出したので、若し新聞に出れば男から捨てられ、明日から糊口に差支へるからと云ふ窮狀に同情して手を引いた。然し何うだらう。彼の女は彼の女は小奇麗な二階に住んで、お孃さまのやうに派手に裝ふてゐる。婦人運動を芝居か音樂會に出る心算でやつてゐたのかも知れない。然し獨りこの女ばかりは攻められない。生涯獨身主義を叫んでゐた運人運動の一方の猛者が、年下の男の子を孕んで、運動から退き、十年連れさうた夫や子を弊履の如く捨てる人妻があり、アメリカ界隈まで情夫を追ひかけて、强請的の結婚をして天下に恥をさらす圖々しい女もある。運動先で懇意になつた有妻の男と一緒になつて、糟糠の妻を追ひ出し、猶夫をかへて再び捨てると云つた毒婦のやうな生活をやつてのける婦人もある。姉妹して一人の夫を爭ふ醜くい爭や、聞けば聞く程婦人運動者のうちには自由と享樂をそのまゝに行ふてゐる勇者がある 既に彼の女等は、男女の對等を叫ぶ必要のない程に、女の自由と力を恢復してゐる。これ等の選ばれたる勇氣ある婦人の夫となつた男達こそ

散々人生の苦酒を飲ませられた不幸な人達である

■……ダンスホールに孵る
モダンガール

そんな理屈など醜くい女にまかせて置け、青春に燃ゆるこの若さを何によつて慰めやう。何によつて火花を散らさう。と考へる金も時も、餘裕のあるブルジョアーの娘、比較的高級のショプガール、（タイピスト等）それに美と戀に縁の深い舞台の女優と、近頃では幅のきくキネマ女優――かうした惠まれたモダンガールは、何處に集まる。先づ音樂會から劇場へ、活動寫眞館からダンスホールへ、そこには甘い舞踏曲のリズムに連れて、若者の青春が花のやうに咲いてゐる。彼の女等は理窟はない。唯咽喉を濕ほす飲物、男女の身体から匂ふ香ひ、身体の感觸等の官覺的陶酔にしたれば

薄給者を保護せよ

小笠原豊夫

△失業者を救濟せよと喧傳せらるゝ折柄私は偶然の事で更に新らしき問題に直面した。夫れは薄給者の保護問題である。

△過般大阪に於て極東聯盟協會の發起にて中の島公園及び天王寺公園に於て失業者に温飩饗を應した。私は協會から相談を受けて此仕事に干與して兩公園に出掛けた。天王寺公園のは九月十六日の午後七時半頃であつたが折惡しく雨が降り出した。音樂堂の周圍には數百名の失業者（?）が群がつて居た。私は音樂堂の上に立ちて一場の演說を試み、心から彼等の運命を慰めた、彼等は急所々々に於て熱心に拍手した、其光景は何となく悲愴であつた。

△サテ私共の演說が終はるさ一同の人々に切符を渡した。夫れはウドンの切換券です、處で、其切符を渡す時の混雜は大變なものであつた。何分キ催者側の方でも手不足でもあり、準備が不行屆であり、其上雨か降り出したので殆ど始末に付か無かつた。私も切符の渡し方を手傳つたが、群がる人々の總てが失業者で無いこさが偶然私自身に發見された。可成りな洋服を着てカバンを小脇に抱へた人や、袴を着けた人や其他誰の目にも失業者さ見へない人が仲々に多かつた。ソンナ風の人々に對して委員の一人である私の友人は、あなたは失業者でありますまい、さ言つて切符を渡さなかつた。が、私は總べて手を出す人には悉く切符を與へた其刹那に私は考へた。失業者で無い人で

（二十九頁につゞく）

いいのだ。そしてそこに湧いて來る男女の享樂の夢に誘はれて、固い處女の蕾は綻び、人妻も令孃も女優もタイピストのけじめなく、享樂の兒になつて仕舞ふ。市内と言つても京橋から日本橋にかけて、七八ヶ所を算へるダンスホールは、かうした男女の會員が、毎夜何百人となく出入して、警官ににらまれながら、甘い囁き、愛の抱擁に人生の春を歌つてゐる、彼等男女は言ふ。「自分らは享樂の爲ではない。外國人と交際する爲に稽古してゐるのだ。」又「人間は踊ると云ふことは最も本能的のことで、踊らぬ人類民族は不幸である」と。理窟は何とつかうと、足一度ダンスホールの舞踏曲につれて男女の抱擁の味を知つた女は、知らず識らずいろ〳〵な男の性格身体氣持に心を惹かれて、平凡な家庭生活や社會生活に厭けがさし、夜となれば自ら舞踏曲のリズムに氣は落着いてゐられない。かうした病みつきから、あの歡樂の紛圍氣中にあつて、浮れ男と一夜の享樂にふける女は尠なくない。最近各警察署が待合に出入する男女の半ばは藝者でなく素人女であると、斷言してゐるのでも思ひ半ばに過ぎる者があらう。應ずる女があれば何人でももて遊ぶことを以て特權の如く思ふてゐた男のやり口が、遂に女に傳染して、ショップガール、キネマ女優の内に、それを享樂と心得て、繰返へしてゐる者が多い等は論より証據だ。必らずしも新聞紙を賑やかす知名の男女のラブアフエヤー許りでなく、かうしたダンスホールから孵化しつゝあるモダンガールの享樂ぶりの如何に大膽になつたかを記憶して置いて下さい。

■……虚榮から人肉の市へ

先頃市内に千人の闇の女を率ひる人肉の市として、新聞紙を賑やかした事件の裏をさぐると、そこにはいたましい孤獨娘の生活不如意と云ふ氣の毒なものもあるが、大体はモダンガールの内に數へられる女達であつた。それはどの女と共通に虚

榮と云ふ幻影にとらはれてゐた事だ。勿論虚榮は今に始まつたことではなく、女特有のものではない。然しながら我慢すればそれで結構生活が出來るのに、この程度の着物では、髮では、履物では小使ではと思ふて、その科を生命より大切な貞操を賣つて得るとしたらば、これこそ虚榮と言はないで何としやう。私は地震の直後家を燒かれ、財を失ひ、着のみ着のまゝの東京人は、こゝ數年は嘸かし質素な風をして、一心不亂に働らくだらうと思ふた。然るに一年經たぬに以前にも增して文化ばやりの世の中に戻つたのは、復興といふ空元氣からでもあつたが、矢張り主なる原因は、世界大戰の好景氣時代に味ふた贅澤の習慣からぬけ出られぬからだ。されば金のない者も、ある者も、ある程度の裝ひをしなければ、一人前の取扱を受けぬ。かうした世の中にあつて、最も華やかな流

此一杯のウドンを要求する人は寧ろ一層の悲慘を彼等の生活に秘めて居るのであるまいか、と。同時に私は痛切に考へた。失業者の救濟も急要ではあるが、働いても〱も十分に衣食することの出來ない薄給の人々を救濟することは寧ろヨリ多く必要ではあるまいか。薄給のサラリーマンの如きは。自分自身も相當の服裝をせればならず、小供の敎育費は用捨なく絞り取られる、不十分なる現在の位置でも、夫れを持續する上に於て勤務以外に其生活上の形式を整へることに日々の疲勞と苦痛を感ずることは到底筆紙の盡くす所ではあるまいと思はれる。あなたは失業者ではありますまいと言はれながらなほ手を差出してウドンの切符を貰はうとする其心理狀態に對して私は考へさゝれずにはゐられない。彼等に相當な勤務をさせながらなほかつ失業者の群に交はりて一杯のウドンを貰はせるやうな悲慘な生活に突き落して置くのは、本統に殘酷な仕打ではないか。

私は其晩から、失業者の救濟よりは寧ろ薄給者の保護を叫んで見度い、と考へ初めたのである。失業者の中には放蕩や怠惰の爲に、自業自得のドン底に落ち込んだ人も澤山あります。假令ソンナ人をでも共存共榮の理想の上から勿論私達は之を救濟し度いと思つて居ます。夫れならば日々正直に働いて、夫れで尙且つ家族を十分に養ふことの出來ない人がありとすれば、尙更此等の人々を救濟せずには居られますまい。かゝる人々を保護する爲に私共は大に頭を痛めればならぬことゝ思ひます。

行を追ひ勝ちな婦人の世界には、如何に多くの虚榮女が生まれ出たらう。自分の顔や才能を考へずにキネマ女優を志願する女、なりふりが目立つてほこりにまみえぬので女店員を望む乙女、自ら贅澤な洋裝をこしらへてハイカラになつてゐられるのを樂しみに、洋服裁縫師や美容師を願ふ婦人の如何に多いことだらう　かうした虚榮は贅澤を强いる現代に於ては益々婦人の胸に深く描かれる。

されば虚榮から貞操を失ふた女に比べて五十步百步の違ひさへない。人肉の市に集まつた彼の女等は働らくにも腕がない、雇はれるには娘の花を通り越した、しかも世間並の虚榮は充し度い。こゝまでつき進んだ女が一寸した誘惑から操を捨てるまでにはさしたる煩悶もない。一方にダンスホールあたりから肉を賣るストリートガールが生まるゝとすれば、之は貧しい家庭の間から闇の夜にまぎれて生まれて來る、警察の檢擧が如何に嚴しくいつても、文明が、かうした闇の女を生むやうに作つてある以上また一雨あれば茸が生ゐるやうに、出て來るだらう、彼の女等は氣の毒なモダンガールの一種である。

■……都を覆ふウエトレスの群

之に比べてカアフエー、レストラントの明るい灯の下に咲くウエトレスの世界は何と云ふ勢で發展して行く事だらう。ここには少しの遠慮もないまるで花柳界といふ舊時代の遺物をせゝ笑ふやうに現代的氣分に浮れて發展の聲を擧げてゐる。さうだ東京府下に約三万人の女給が每夜浮れ男の相手をしてゐるといふから驚ではないか。銀座の眞中から塲末の通りに至るまで、軒を並べてカアフエーが展開してゐる。ここは民衆的だ。ビール一杯から訪れる客がある。飮ませる喰はせる歌はせる自由だが、一流どころを除けば何れも女が賣り物である。ライオン等では、「この店には料理と食器の美しいのと親切しか賣り物はない」と言つて

ゐるが、並ぶ女給に十人並み以上の美人を集めて置く以上、カアフエーの呼物は喰物よりは女だ美人である。唯ライオンやコーザンが料理を運んですぐ女給の席に戻り、客とべた／＼させないのは感心だが、大方は客の喰物まで分けて食べる程にベタ／＼させて、客に澤山の料理を食べさせ、秋波一つで又來るやうに仕向けるのが常である。

女給と言つてもなかには家の生計の補助の爲勤める者もあるが、主に享樂と自由とまう一つは樂が出來て美衣が纏ふてゐられると云ふ誘惑があるからだ。恐らくこの意味でカアフエーの女給程一人でモダンガールの欲求を悉く享有してゐる女の群は少なからう、モダンガールの研究をし度いものは活動の女優よりもタイピストよりも、このウエトレスを眺めるがよい。彼の女等の髮、化粧、着物、言葉使ひ、客あつかいと云ふより男扱いの中には、今後の女が持つ自由と享樂が多分に盛られてゐる。チップの少ない固定給のないウエトレスは抱主承知で十一時の店が退けると闇に姿を消しチップを百の百五五十のと懐中にするウエトレスは、金の力で親や家庭の者には苦情を言はせず馴染みの客と一夜の享樂にふけることは平氣である。亦ギコチない遊廓の娼妓を相手にし、物入りの多い藝者よりも、素人氣分、女學生氣分の濃いウエトレス相手の方が面白いと云ふことで、益々この方面は發達して三万人のウエトレスが生まるゝに至つたのだ。私はこの恐ろしく都を覆ふが如くに發達するウエトレスを、最も代表的なモダンガールの一種類として、彼の女等が男女關係や流行界に影響を持ち來らす現象を不絶觀察してゐやう。（大正十四年八月二十四日記）

「歸る日」の會に出て

YN生

奥むめおさんたちの發起で、奈良女高師の池田小菊さんの小說「歸る日」の出版記念會が、本鄉の燕樂軒で開かれた。九月十二日である。

あいにく發起人の奥さんは御不幸があつて、急に父一氏の鄉里紀伊新宮町の方へ歸られたので、後のことを志垣さんが世話されることになつた。そのためこの會のあるべき日の前日に、私も志垣さんと一しよに、この會の發起人の一人である宇野千代さんを訪問することになつた九月十日の午後だつた。私たちは目黑から蒲田線に乘つて、洗足で降りて、大根畑や薩摩芋畑の中の道を歩んだ。馬込村の宇野さんの家を訪ねるためである。作家を訪ねるほどうれしいことはない。それは眞實な人間にふれる喜びである。默りものでもいゝ。おしやべりでもいゝ。ごつくてもいゝ。おしやれでもいゝ。それが何でもいゝ。人にはきつと生れながらの持ち味と言ふものがある。その持ち味を飾らずに見せてくれるのは作家である。私たちがよく聞きなれてゐる平凡な言葉が作家の口から出てくる時、一つの魅力を持つ。それを私はうれしいと思ふ。私は學者や事業家に會つてみたいと思つたことはない。でも何時も作家には會つてみたいと思ふ。その日も私はそうした喜びを心に感じながら、畑の中の道を歩んでゐた。行つても行つても馬込村中井はみつからなかつた。私たちは話し話し歩んだ。その中に秋の日はとつぷりと暮れた。私たちは大きい梨の實つてある一軒の店をみつけて、暫く休んだ。

△

宇野さんの家は、もうそんなに遠くはなかつた。一つの岡があつて、その南の傾斜した土地に立てられた二棟程の洋館それが宇野さん（尾崎士郎氏）の家だ。庭に入ると、暗い中から、電燈のもれた光に萩の葉が青く光つてゐた。

私たちは應接室に通された。應接室と言つても、ミシン臺が据えてあり、一方の隅にはお釜も据えてあつた。或はこの部屋がお勝手なのかも知れない。私は何とはなしにニコ〳〵して、そこらのものを見た。そして、くつろいだ氣持ちになつた。冷たい應接室へ押込められて主人の出てくるまで四角四面な掛抽と、睨みつらしてゐるより、投出されたお釜をみてゐる方がよつぽど嬉しい。やがて庭下駄の音がして、宇野さんが入つて來られた。挨拶も簡單に用件に入つた。

「であなたに主人役をやつていたゞきたいのですが。」と志垣さんが言ふ。

「いゝ、仕事は私に出來ることなら、何でもいたします。でも何か挨拶せればならんのでせうか。私時々人の前では口が動かなくなるので……」宇野さんは、眼を据えて、心持ち考へこまれる。

「挨拶の方は誰かにたのみませう。とにかく作家の人たちの應接の方をお願ひしたいのです。」

話は無駄がなく、然も心持ちよく運ばれた。

「池田さんて、こんな方ですか。あのやさしい心の……」

宇野さんらしい夢を辿つて、描かれた池田さんの想像を語りだされる。作に就ての感想も語られる。

「池田さんは得意でゐらつしやるでせうね。誰もが持つ處女作の幸福、それを滿たさせてあげたいと思ひます。」

そう言つて宇野さんは又じつと瞳を据ゑられた。

私たちは尾崎氏にもお會ひしたいと言出した。そして裏の離れの方の尾崎氏の書齋の方へ行つた。そこでしばらく語つた。

尾崎氏は語る態度も話の内容も非常に眞面目である。それはうれしい、眞面目である。それは親しみとくつろぎを感ずることの出來る眞面目である。

午後九時私たちは宇野さんの家を辭した。

△

九月十二日に私は上野へ佛展を見に出かけた。そして上野から市内電車で、本郷町三丁目まで來た。すぐ燕樂軒へ行つて、二階へ上つてみると、もう池田さんを中心に、志垣さん木蘇さん宇野さんが話してゐられた。

木蘇さんは自分の思つてゐたよりふけた方だつたが—私は二十五六かと思つてゐた—やさしさうな顔だ。

△

受附の附近へ行つて、ぶらり〳〵やつてゐると、洋裝の女學生らしい方が入つて來られた。

「吉屋でございます。」

吉屋信子さんだなと思つてみてゐると、會場の方へ行かれる吉屋さんの後姿を見送つて宇野さんが、

「感じのいゝ方だつたわ」

と言つて、受付けから立つて會場の方へ行かれた。初體面と見える。

やがて、一人の背の低い方が無雜作に入つてきて、受付の机によつて、出席者名簿をみながら、眼をキヨロ〳〵されてゐる「菊地寛さんではないか知ら？」私は雜誌の中の寫眞でみた顔からそう思つた受付けの方が、

「どなたですか」と尋ねると、

「菊地です」と答へて、すた〳〵會場の方へ歩まれた。

「やつぱり菊地さんでしたわ」受付けの方も、それなら尋ねるのではなかつたと後悔したやうに笑はれた。

伊福部さんの奥さんも來られた。新聞記者の方も來られた。文士の方は少かつたが、教育者側の方は知人が多いだけに澤山集つて來られた。

△

會は開かれた。川崎夏子さんから開會の挨拶があつた。そして、池田さんとは全縣でもあり、婦人の社會生活向上の强い協力意志を感じてゐられる奥さんこそ最も熱心なこの會の發起者であり、心から池田さんの處女作を喜んでゐられる方なのであるが、その奥さんが、この會に出られなくなつたことを殘念に思ふといふ感想があつた。

やがて新居氏が來られた。

△

菊地さんは、「私は女に甘いそうです」とちつとも笑ずに話しだされるが、どつかにユーモアが漲ぎる。さて話は「作家の方の出席が少いので淋しいとか言つてゐられるやうですが、作家を多勢集める

ごとなら、婦人の方だけの發起よりも、私を發起になさつたら、もつと多勢集められたかも知れない。そして女の會によく出るこ名を打つた私だから、喜んで發起人になるのだつた」と結ばれるので、あちこち笑聲が起きる。

「私は朝日新聞の上では二、三度歸る日を拜見しましたが、まだ作品全体を發見してゐません。然し池田さんの著「私の教育記錄」と云ふのを發見して、頭のいゝ方だと思ひました。恐らく「歸る日」もいゝものだらうと信じます。なぜなら、論文と言ひ創作と言ひ、その根底をなすものは、ものを觀る眼であります。」と語られた。

△

吉屋信子さんが立つて、

「私は「歸る日」を朝日新聞紙上で毎日見てゐました。熱心な愛讀者の一人であります。女の方の作たと、負けちやならないと思つて一生懸命になつて讀むんです」と語たられたので、あちこち笑聲が起る。

「大そういゝ作だつたと思ひます。私もこれからうんと勉强して、うんといゝ作を作つて、出版記念を開いて菊地先生にその發起人になつていただきたいと思つてゐます」と愛敬をみせられた。

△

池田さんは、敎育者と云ふ生活が、自分を人間味のないものにしたこと、そこで、どうかして、ほんとうな自分自身へ立ちかへりたいと憧れたこと、そこに創作をするやうになつた動機があると、自分の氣持ちを話られた。

△

閉會後、又しばらくは別席で雜談に花が咲いた。しやんとした顔を時々ほころばして語る池田さんの顔が誰かに似てゐると思つても、ついに私の頭の記憶が誰であるかを思ひ出さなかつた。

△

やがて皆歸られた。吉屋さんの白い洋裝姿も、宇野さんの黑い柔かい髮も、菊地さんの丸い肩も、水蘇さんの四角い肩も、新居さんのムシャ〱した頭も、みんな、次ぎ〱と燕樂軒の玄關から、夜の人込の中に消ゑて行つた。最後に私たちも池田さんと一しよに、大塚行きの電車に乘つた。

火と火を

望月百合子

友よ
私はかなしい
なぜそんなに從順なの？
まるで機械ででもあるやうに、
れい一寸働らく手をおやめなさいよ
そして ようく 心を落つけて
あなたのまわりと 遠いところとを
眺めてごらんなさいな
おゝそしたら友よ
きつとあなたはみるだらう
そして憤ろしくなるだらう
一人の人間の憤りは小さくて
マッチの火のやうに儚いけれど
おゝ友よ
小さな火と火が澤山あつまれば
この宇宙をも燃ゑ狂はせる！

老兵吟

——中野緑葉——

ここにも時代の浪は白く烈しく泡を立てゝ湧きあがつて居る。頑强な岩は次第に鋭いその突角を山められて居る。……十年前私が來た軍隊、十年後に私の來た軍隊！・

曾て、一兵卒として新兵として入隊しつぶさに辛酸苦味を舐め、忠誠一意銃を磨き銃をとつて起居した私は、十年後の今日、今まのあたり、時代の推移にうつり變つた軍隊の起居を見て、異樣の感に打たれました。何と云ふ變りかたであらう。私は驚きの目をみはる。

十年前……そこには野蠻な腕力が「軍人の勇氣」の現はれとのごとく存在し、古參の兵卒の手は、拳は、常に弱くして柔順な新參の兵卒の頭上に、絶大の威權のやうにおほひ被さつて居た。そして、打つ者も打たれる者も、敢てこれを怪しまず、打たれる事も「軍隊生活」の一つの仕事とのやうに思ひあきらめた。

十年後……大正十四年晩夏、老兵の私は、後備兵勤務演習の爲に入隊し、そして曾て起居した私の若い日の住家に來た。

私は今、過去の慘苦にみちた生活を追憶しつゝ、現在の空氣を胸一杯に吸ひこみ乍ら、呆然と低徊して居る。（九月末旬）

曾て私は新兵當時うたつた。

虐げられ再びもとのさやけさにかへらぬ魂を習しみつむる

◆

さごせ前の古きづいたむなにしかもひたうづくふり庭に立ち居れば

（以下勤務演習在營中）

◆

おそ夏の日はあか〳〵しかぎろひの練兵場は見るにまばゆし

◆

銃さげて行くは徒歩兵銃かたげ行くは徒歩兵直營日の原を

◆

なほなほに飯食ひ居ればからからごさやかに聽こゆ砲車のおさは

◆

汗にまみれわがごちが行く原つぱにあな重々しおづつのひゞき

◆

銃ためつゝ見ゆる遠野は小田ならん風かよふらし音す微かに

◆

午後六時目にさやりなく練兵場ほさほさ飢ゐてわれら歸るも

◆

聲かぎり唄ふは軍歌いごしごを思ふさ友は云ひにけるかも

◆

たまきはる消燈喇叭小夜ふけて家居の妻したゞに思はる

一日朝早く射撃場に至る

◆

ふるさとの山にかゝ似るみんなみの山並みに白くうす霞せり

◆

目路とほく朝居る雲にかくれたる名草の山のなだれはゆるし

◆

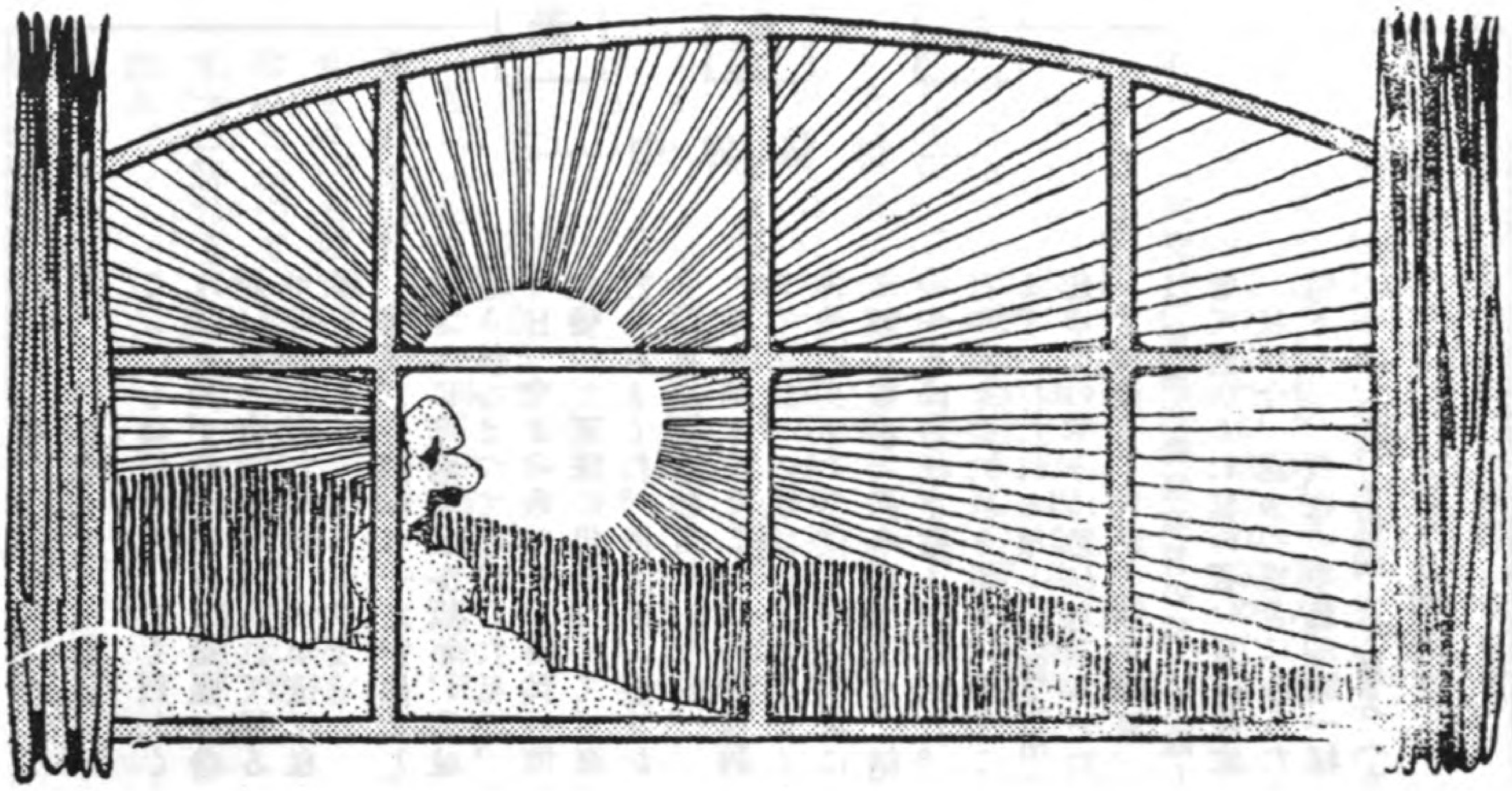
射撃場にあさ日あか〳〵照りなづみ露たるゝ草をわけつゝ歩む

◆

絨衣に染む草の匂ひのはげしくてまなこを閉づる日を背にして

◆

さやかに、銃音きゆるたまゆらをきりぎりすなけり原のそここここに



象使ひ

榎本文太郎

――君は多分バルザックの「砂漠の熱情」といふ小説を讀んだことがあるだらう、御承知のとほり豹が人間と戀におちる話だ。素敵に面白くて僕はすつかり醉はされてしまつた。

……が一体あの話はほんとうなんだらうか。僕はどうもバルザックがあの男一流の夢であゝいふ風な話をでつちあげたとしか思はれない。がもつとも動物にだつて戀がないと誰が斷言出來るだらう。もし人間の方で誠心誠意しずかに慣れしたしんで行けば彼等にだつてその眞情は通ずるのではないだらうか。殊にライオンや豹やの如き猛獸はその

怒りも、どうもうである代り、魂を打ちこんでいざとなると、その戀も亦無類に白熱するんじやないだらうか。そしてさういふ時の彼等のしなやかさ、あざつぽさは又どんなに可憐なものだらう！。僕は折角バルザック流のロマンチックな話は持合せないが君なんかも見たかも知れない象使ひのことを話さう。珍しくもない話なんだからその積りできゝたまへ。

何でも二三年まへの九段の祭が終へた翌日だつた。僕は近所の子供を連れてもの珍しさうに輕業小屋や見世物の跡片附を見て歩いてゐた。

そのうち大鳥居の近くまで來た時、僕はまだ小さなテントを張りまわしてゐる小屋を見つけ出して一種の好奇心にもかられて近附いて行つた。

小屋のなかには厩のように藁が一ぱいとり散らかされてあつてまんなかに大きい、と云つても象としては中位の大さの象が一生懸命に太い大鼻を振て藁をそろへてゐる。そして始めは氣付なかつたが、よく見ると象の後足のところに人間がひとりうずくまつてゐる。間もなく立上るとその男は象のザラ〳〵した皮膚に一々さわつてはホンのちよつとした傷もないか、羽虫でもとつゝいてゐないかと、眼をあの大きな象の壁にすりつけてゐる。さうして絶へずブーンと飛んでくる蠅を丹念に追ひはらつてゐる。そして時々象の耳のあたりをペタ〳〵たゝいたりやさしく掻いてやる。すると象は全く嬉しさうに、といふよりも氣持が好くてたまらないと云つたやうに、あの小つぽけな眼をつぶつたり開けたりする。さうしてゆつくり〳〵と耳を動かして一切男のするがまゝにまかせてゐる。象は恰度人間の子の

やうにうつとりとして、この愛撫者の手に大きな圖体をすつかりまかせ切つてゐる。

その男は僕等の方に背を向けてゐたので分らなかつたが、ふと横を向いた拍子に眼のギロ〳〵した眞黒い顔のなかから白い歯をむき出して笑つたのでインド人だといふことがすぐ分つた。

僕は見て居る中に象の性質があんまり從順なものだからビスケットでも投げてやらうとおもつて、傍にゐた一見助手格だとわかる五拾ぐらひのお爺さんに、この象はおとなしいのかと訊いてみた。

するとお爺さんは滅相もないといふ調子で

「どうして！……この象なんざあこれでむかふでは三人程人をいためてゐるのです。だけどあのインドの親方にかゝつちやあだいなしさ。といふのはどんないたずらをされても、たとへいくらくすぐられたつて、いぢめられたつて……さうさ、こないだの祭にや槍で眼を突かうと身構へしたが平氣なもので親方を信用しきつてチッところがつてゐるんでさ。……へへ。馴れると妙なもんでさナ」

「はゝあ、じやあのインド人が生捕りしたんだらうね」

「いゝや、つかまへたのは別の人なんだが、乳呑子から飼ひ育てたのはあの先生なんです。あの男、あれでいつでも象と一緒にねるんですよ。のんきなものですナ――何ともないと見へる。それに象があの男を追ひまわさないのは奴さんがはばかりへ行つた時だけなんで……斯うなると畜生だつ

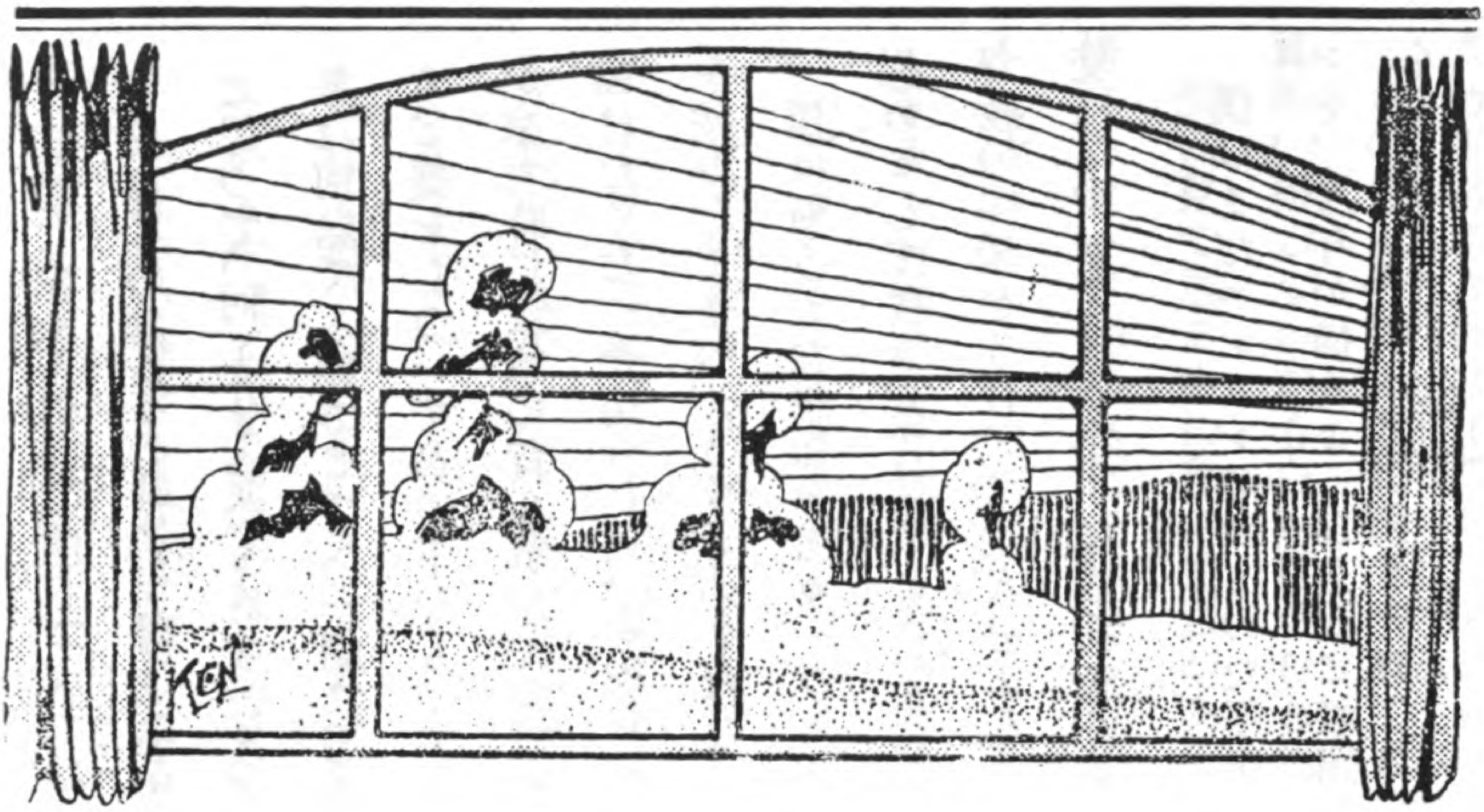
て馬鹿に出來ませんね」

僕はこの話をきゝながらインド人と象を見較べて、動物でもこうまで可愛ゆく馴れつくものか知らと思つて、何となく涙ぐましくなつた。どんな遠いところへでも、興行を打つて流れて行くんだらうが象は何處でも親方とさへ一緒に居るなら、インドの山の中に居るのとちつとも變りなくいつまでも悠々と藁をしごいて鼻の下をもぐ／＼させてゐればいゝのだらう？…。……そしてインド人が旅で疲れが來た時には象の背に乗つかつて旅するのだらう……そしてひよつとしたら若し親方が病氣になつて動けなくなつた場合には、あの長い巨大な鼻を極度に注意深く動かして藁を運んだり、それに痛い箇所を按摩してやつたりするのではないだらうか？　――

僕は斯うした想像を次々へひろげて行きながら、この象使ひが象だけを生活の唯一のたよりとして、慰めとして生き、象は象でこの男を最愛の親身とたのんで、云ふがまゝにどんないやなことでも忍んで見物の喝采をうけ、て主人をよろこばせるのだと思ふと、このしたしい、しかし可憐なふたりのふかい交はりが何となく小さな悲壯とでも言ひたい感動を僕に與へた。

僕はまだエプロンのかゝつた子供といつまでも手すりにもたれたまゝ、このふたりのコスモポリタンを、少年が描くような美望と嫉妬の念で見つめてゐた………。「あの象がほんとうに俺のものだつたら……」と。

（二四ノ九）



灰色の朝

榎本八十子

「こんな日が長く續くつてことは怖ろしいことだと思はないかね。わたしはね、久子、仕方なしに奉仕されるやうで堪らないのだよ」

「仕方がないことは仕方がないのよ。そんなことで、愛がどうのこうの云はなければならない程、あなたはわたしを淺く見ていらつしやるの?」

「何と云つたつてそうとより外、思へないじやないかね。久子が口に出して訴へる程、そんなに健康が害なはれてもゐないじやないか。一つの口實だと思ふね、なるべくなら逃げてゐたい……と思ふからなのだよ」

「わたし嘘は吐かないわ。本當のことを云ふより外、どうしようもないじやないの、それともあなたがわたしに外の嘘を強いるのならわたしそれこそ、仕方なしにあなたの道具になつて上ませう。

それ、それ、そんな厭な顔をなさるわ。だつてさうするより外にわたしがどうすればいゝと仰つしやるの。あなたが始終云つてらつしやる通りに、性慾といふものを重く見てゐればこそ、無暗な氣持ではゐられないといふのよ。それに、今、わたしに全然さうした氣持が起らないんだから仕方がないといふのよ、それが愛してゐない證據にならふとは、わたし思つても見ないことなんだけど」

「久子は、わたしと離れて暮すことが出來るか」

「出來ないと思ふわ」

「何故、出來る筈じやないかね」

「出來ない、それは出來ない。あなたのやうに、肉慾の愛情でもつて、淺い判斷を下していらつしやるのとわたしは違ふから。夫婦つていふものはそんなありふれた感情に左右されるものじやないと思ふわね。

今の多くの男は、決してわたしのやうな女を妻に持つことを望んではゐないと思ふのよ。たゞ愛撫されるまゝに甘へて行けば、何も苦しむことはちつともありはしないんだものね。わたしのやうに、性慾に反抗許りしてゐる者を、あなたが必死になつて追ひ詰めやうとなさつてるのは本當にお氣の毒なのよ。いくらわたし自身が、そんな心を起し度くない、今度こそ、今度こそと思つてゐながらあなたの顏を見るのも厭になつたり、聲を聞くのさへ心を撲たれるやうな不快を感じるんだもの。そしてね、そんな、あなたに取つてはこの上もない侮辱的な心持だと云つても決してあなたを憎んでゐるのじやないのだわ。

むしろ、わたしを、わたし自身をひどく憎みつけてゐるのだわ、こんな厭な、寂しいことつてあるのだらふか」

「…………」

「ねえ、わたしがこんなに一生懸命になつて云つてるのに、あなたはまだわたしをひどい利己的な人間だと思つていらつしやるのね。それとも、わたしの云つたことなどは、あなたの耳に入らないかも知れないわね。それならそれでいゝわ、あなたはそうしてわたしを責めてさへゐればいゝのだつたら、あなたの生活はだん〳〵滅びて行くのだから」

「理屈よりも實行だよ、久子がそんな文句を云ひ出すといふことが、もう既に愛情の濁つた證なのだよ。それでなかつたら、わたしの身になつて考へてもいゝ筈なんだからね。恐らく久子の夢の中に、わたしの顔は惡魔になつてゐるだらふよ、ね」

「惡魔になつたことはないけど、あなただか外の男の顔だか解らなくなることはよくあるわ」

「そんな捨鉢いふものじやない。あんまり久子のやうにありのまゝを云ふと汚ない」

「嘘云つたら、あなたは怒るでせう、ああ、わたし何だかあなたが可哀想になつて來たわ」

「氣儘者」

「本當を云ふとね、わたし女に生れて來たことが口惜しいの、何だか一生恁うして征服されて生きて行くのかと思ふと、眼先きが眞暗になるわ、わたしは、あなたを征服してやり度い。えゝ眞實なのよ、あなたを、わたしが」

「それはいけない、少くともわたしは久子を征服しやうとして對したことはたゞの一度もないじ

やないか。わたし位道德的の人間はないのだぜ。だが、久子がわたしを玩具にしたいといふのなら、わたしは悅んでなつて上げるよ、そうなると面白い位だね」
「信じて下さらないのね、わたしの思想は、あなたにとつて隨分危險なのじやありませんか」
「瞭り云へよ、わたしのやうに察しの惡い人間にや、もつと明瞭に云つた方がいいよ。好きな男があるなら、早くそつちへ行き度いつてね」
「そう仰つしやりながら、あなたがわたしを見るその眼は執拗ね。あゝ、もういゝわ、お互にこんなこと云ひ合はなくつたつて、よく解つてる筈なんだわ。たゞ、わたしが、一日も早く丈夫な体になればいゝのだわ。ね、それまでどうぞ靜にさしてね、わたしになるべく觸れないでね、又今日一日わたし考へるから、お厭でも元氣よく起きて下さい」
昨夜からの彼と久子との爭鬪は、遂々朝まで不愉快に續けられた。久子の變態的な性慾に對する呪咀は、これでもう一年の余も續いてゐるのだつた。
彼の可憐らしい程の純情を、たゞの一度だつて素直に受け入れたことのない久子も、それを誇つてゐるわけでは決してなかつた。久子はそれを、彼女の健康に責を打つけてゐた。
事實彼女は、二年前の產後から引き續いて、無理を許されない体になつた。
朝も、彼が先きに起きて雨戶を開けたり、夜具を疊んだりするのだつた。その間も彼女は萎へ切つた体をじつと仰向けて、彼の侘しげな　怒ることも出來ない心の中を追つていつてゐた。
雨戶が繰り擴げられて、朝の明るさがぱつと部屋の中に流れ込んで來る。彼女は痛みつけられてゐるやうな眼を細く開けて、硝子戶越しに戶外を見上げた。樫や欅や、その他の雜木に、昨夜

の雪が薄く降り積つてゐた。
　彼が雨戸を開け切つて、寢卷きを動め着に着更へ終つてしまふと、久子も强られて床を離れた。彼女の眼はすぐ戸外に向けられた。
　古くさい陰氣な部屋の中の色彩や、取り散らされた夜具などに不快な思ひ出がこびりついてゐるので、彼女は追ひ掛けられるやうに眼先の變化を求めた。
「何だか雲の色が變じやないの」
「降り方が少ないからだよ」彼は何氣なくそう答へて、忙しさうに部屋の中の取り片付けに掛つた。
　久子は忙然とした頭に不快な疼痛を感じながら、緣側に立つて襟を搔き合せた。
　四邊り一体どんよりと濁つた中に、さゝやかに動いてゐる樹々の葉が、妙に蒼ざめてゐた。何といふことなしに、怪しい空に、白い雲が亂れてゐる。
「何もかも灰色だ、重苦るしく壓し被せるやうな空氣だ」久子はそう思つてふと足元に眼を落した。と、同時に、おやつと低く叫で身を退いた。
「何でせうね、ちよつと」と、誰にともなくつぶやいて、身を屈めて人差し指を伸ばして緣側を擦つて見た。緣側の板目は瞭りと一本の線が印されて、彼女の指先きに褐色の粉がやんわりとついた。
　久子は再び空を見上げた。樹々を見た。地上の雪の色を見た。
「昨夜、灰でも降つたのじやない？、まさか糠でもないでせうね」

久子の特異な叫び聲や、動作にまで無關心でゐられない彼は、兩手を握り合せ乍ら、彼女の傍にやつて來た。

「どうしたつてんだ、朝の默りやさんが一人で驚いたり何かして」

「わたし達が靜かに眠つてゐる時、音もなく灰が降つて來るなんて、まるでお伽話見たいだわね」

「ほう、珍らしいことだね。何處かが爆發したんだね」

「爆發!、そう、そう、きつとそうよ。どんなに凄さまじかつたでせうね」久子は考へ深さうに瞳をくるくると動かして、憂鬱な笑ひを口元に浮べた。

久子は立つてゐることも堪へられなくなつて來た。

「体も心も、ゆつくりと靜かに休息ませ度いな」

久子はかけても望まれない慾望に、全身がぐたぐたにへし折られてしまひはしないかしらと思ふ程の動搖を感じた。その時、部屋はもうすつかり彼の手によつて片附けられて、彼女の淺み切つた身や心を投げ出す余地は何處にもなかつた。

「久子、しつかりしろよ。愚圖々々しくしてゐると、娘達がやつて來るだらうよ、お察しの出來ない娘さん達だからね」

「あゝ厭だ、厭だ、毎日毎日何寸何厘だの、針の打ち方がどうだの、衿が曲がつたのつて、わたしの口はよく減らないものだわね。それでお饒舌に際限がなくて、少し烈しいことといふと顏を眞赤にして、腹の中ではわたしを罵つたり呪つたりするのだものね。わたしの娘時代は、もつともつと考深く物を見たり云つたりしたものだわね」

「その娘時代の重苦るしい氣持を、そつくりその儘今の生活に當て嵌めてゐるのだからね」

そうも云へるでせうよ、だつてわたしの生れつきといつたものは、容易なことじや變化しやうがないわ」

久子はそう云つてじつと柱に身を寄せかけたなり、今にもかたことと、若々しい足音を立てゝ針の仕事を習ひに來る娘達の顔を、怯へたやうに思ひ描いた。

「自分も、一度は通つて來たやうに、ああいふ娘のやうな氣持でゐさへすれば、彼を有頂点にならせることが出來るのだ、けど、そんなことが、そんな嘘が――」と思ふと、彼女の心は又ざさりと、忘れかけた元の憂鬱さに返つてしまつた。

「何だか怖ろしい朝だな」彼は舌打ちをしながら顔を洗いに出て行つた。久子もむつちりとしてその後に從いて行つた。



編輯室にて

新宮川のほさり。成川の渡しを往き來する舟の近くに、子供らをつれて水遊び石ころ遊びをして夕暮れをまつ日が大分續きました。今、十一月号の編輯の結びをつけるにあたつて、今更らに、何さ、思ひ設けぬ土地でわが「婦人勞働」が育てられることだらうさ、通ひ慣れた香柏社印刷所のインキの匂ひをなつかしく憶ひ浮べながら、ペンを走らせます。私は波がなくて船がおだやかで運ふなら、明日、いよ〳〵こゝを出立しやうさしてゐるのです。

――五月、私が九州旅行をしてゐた頃から病ひの床に臥つてゐた母が、さう〳〵八日(九月)になくなつたので、急ぎこの土地へ歸つて來たのでした。

いろ〳〵の取込が多かつたために、編輯印刷の準備が出來ずに、さう〳〵十月号を出すことが出來なかつたことは返へす〴〵殘念です。お問合せ下さつた多くの讀者諸姉に、一々御返事を差上げ得なかつたお詫びいたします。さ同時に、いよ〳〵大阪支部も確定しましたし、これから愈々實際運動の第二歩、第三歩を進めてゆくことになつた喜びをお頒ちしたいさ思ひます。

婦選同盟の人たちが夏ぢう會員募集にかゝつた收獲がタッタ六十七名さか、ある新聞のゴシップに見ねてゐましたが、それが事實であるかないかは暫く問はないさしても、たゞ抽象的に婦人參政權さ叫んでみても、政治さいへば、選擧に多額な金子を撒き散らすこさ、家を外にして利權漁りに浮身をやつすこさ、又は議場で野次つたりなぐたりすることさ位にしか考へられてない現狀で……殊に長い間因襲的な家庭生活にさぢこめられてゐた女さして、知識から來る共鳴の外に、ごこに生活要求さしての政治的要求などが湧き上つて來やうさ、敢て云ひ度いほごです。

私たちの目ざす運動は、いつも、私たちの實際生活に根ざした處から、しみじみさにぢみ出るやうにして湧き上る、この私たちの胸の底からの要求を源にしてのみ初められるべきであるさ、私はかたく信ずるのであります。(十、七、新宮にて奧むめお)

前納誌代	
一部	二十五錢 郵稅五厘
半年分(郵稅共)	一圓四十錢
一年分(郵稅共)	二圓八十錢

送金法

誌代は必ず前金の事
送金は振替で願ひます
誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます

大正十四年十月三十一日印刷納本
大正十四年十一月一日發行

發行編輯兼印刷人 東京市外巣鴨町一〇一九 奧むめお

印刷所 和歌山縣新宮町三八二 新宮印刷株式會社 電話二五〇番

發行所

東京市外西巣鴨町一〇一九
職業婦人社
振替東京六四一六〇番

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十四年十月三十一日印刷納本
大正十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第三卷
第八號

【定價金二十五錢】

